

佳作

今、生きていること

岩手県宮古市立宮古西中学校

3年 里見 脩斗

ニュースを見ていた時のことだ。

「ロシアがウクライナ侵攻を開始しました。」

衝撃の一言が僕の耳に入ってきた。テレビに目を向けると、爆弾が落とされて建物がボロボロに破壊された光景が映し出されていた。その時僕の「戦争」に対する考え方が大きく変わった気がした。

僕は「あたり前」だが「戦争」を体験したことも実際に見たこともない。そんな僕の目に映ったあの光景は、僕の「あたり前」を大きく崩すありさまだった。多くの人があたり前に死に、建物があたり前に崩壊する、毎日これが、あたり前、なんて「最悪な世界」だ、と痛感せざるを得なかった。

そんな中でもし、日本も他国と戦争することになったら、僕はどのような行動をとるのだろうか、そう考えたことがある。家族との日常や思い出、友達との他愛のない会話や遊びがなくなる、と思った。「悲し過ぎる」その一心だ。あのニュースを見てから、毎日の生活の中にどこか未練や虚しさがある。友達と遊び終わった帰り道も「もっと話したかった」「明日が来なかったら」とネガティブに考える自分がある。だが、その感情を抱くこと、明日はもっと……と考えることの全てが、今、生きている僕に与えられた使命なんだと気づいた。家族との毎日の「おはよう」「行ってきます」「ただいま」「おやすみ」は幸せなことであたり前じゃない。今、生きていること自体幸せであたり前じゃない。と考えると、生きていることへの喜びが湧き上がってくる。時には争いだって必要だと思う。

中学生の僕だって、たくさんの争いの中で日々、生きている。部活動でのレギュラー争い、テストの順位だって争いの一部。争いの結果、成長や課題がみられ、仲間と共に高めあえる。争いには、共に進んでいくための通過点という意味が隠されていると思う。これからの将来にもたくさんの「争い」が僕を待ち受けているのだろう。その争いを乗り越えた先に「夢」や「明るい未来」があるのだと思う。

このように、「夢」や「未来」を想像することも、今を生きる僕にしかできないことだと知り、幸せを感じた。おいしいご飯を毎日食べていること、友達と笑い合えること、明日が来ること、これら全てがあたり前ではない。

その「あたり前」が長期間にわたって本当に崩れ続けているウクライナ。「他

人事じゃないな。」父が言った。確かに北朝鮮からミサイルが飛んできたり、それこそロシアとの北方領土問題など、日本がいつ戦争に巻き込まれるかは分からない。そんなふうに僕には捉えられた。今までの自分は人の「命」をなんだか軽く見ていたのかもしれないと気づいた。

その数日後、僕の学校では、思春期講座という命の大切さについて学ぶ機会があった。そこで、僕たちが生まれてきた確率がとても低く奇跡なんだということを再確認した。妊婦体験も行われ、体にのしかかる命の重みや一つひとつの動作につらさがあることを学んだ。そんな奇跡やつらさを乗り越えて、今の僕がいるのだと知り、何だか感動した。たくさん喧嘩したりたくさん迷惑をかけたり、誕生日を祝ってもらったりしたこと、全てが、この奇跡がもしなかったら味わえなかった思いなのだと感じた。

その日は、いつも以上に家族への感謝を心を込めて伝えた。夜ご飯の時も「いただきます」「ごちそうさま」「おいしい」に気持ちを込めていた。伝えるということ自体に意味がある。実際、僕の残りの人生であと何回感謝の気持ちを伝えられるのかも分からない。だから、言えばいうほど感謝は積み重なり、増えていき、伝えられなかったという後悔は減っていくと思う。

現在は「戦争」「コロナ」など不安な毎日が続く。そんな毎日を一日一日、しっかり生きている僕や世界中の人々はとてもすごい存在だと思った。「生きる」これが人生で一番難しいミッションであり、絶対にクリアしなければならない人間に与えられたミッションである。何気なく過ごしてきた日々も、僕たち人間はとても難しいミッションをクリアし続けてきたすばらしいことだと言えるのではないだろうか。

「今、生きること」それは、たった一つの奇跡から生まれ「生きる」というミッションのもとで毎日の出会いや困難をくり返し、感謝の気持ちと共に成長し、未来を自分だけの色で染めることだと、僕は思う。

今この瞬間を生きている僕だからこそ「命」や「感謝」を大切に、そして、いずれ過去のことになるこの作文で綴った想いも忘れずに、これからの人生を今、生きていることに感謝し、どんな争いにもぶつかっても諦めずに人生を送るんだと未来の自分へ伝えたい。